
真・恋姫†無双～雷速の双剣使いと焰砕の長刀使い～

神葵御雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜雷速の双剣使いと焔砕の長刀使い〜

【Nコード】

N6346X

【作者名】

神葵御雷

【あらすじ】

20xx年4月1日。聖フランチェスカ学園に二人の男子が入学した。日向双也と北郷一刀。二人が入学して1年が過ぎたある日、二人は修行に来ていた山の奥の洞窟に入った。が、地面が崩れ二人とも落ちた。目を覚ました二人は出口を探す為進んだ。ある所で二手に分かれる道。二人は左右にわかれた。それぞれ奥に進み、奥で二人が見つけたのは、二つの双剣と一つの刀……。処女作です。ダメダメですが、よろしくです。名前変えました。

主人公たちの設定（前書き）

はじめまして、しんきみかつち神葵御雷です。

これからよろしくお願いします！

誤字脱字、もしくはアドバイスなど多々ありましたら、言ってください。

主人公たちの設定

名前：日向双也ひなたそうや

性別：男

年齢：17歳（入学時は16歳）

身長／体重：168cm／54kg

好きな事：仲間・のんびり空を見る事・昼寝

嫌いな事：人を見下す奴・仲間を悪く言う奴

容姿：整った顔立ちで茶色の瞳に肩まである黒髪。

性格：のんびりとした性格。好戦的。困っている人はほっとけないお人好し。基本的に誰にでも優しい。仲間思いで仲間の事を悪く言われると冷静になれず誰であろうと殺気を向ける。相手の心情には鋭いが、自分に向いている好意などには疎い。

身体能力：小さい頃から一刀と鍛練していた。力で一刀に負けている代わりに素早さは以上な程一刀に勝っている。相手の攻撃をいなすのが得意な為、動体視力が異常。

詳細：双剣使い・一刀の相棒・光、闇、雷、風の氣を扱う

名前：北郷ほんごう一刀

性別：男

年齢：17歳（入学時は16歳）

身長／体重：170cm／58kg

好きな事／嫌いな事：双也と同じ

容姿：双也と同じく整った顔立ちで黒色の瞳に双也より少し短めの黒とちょっと茶色がまじった感じの髪。

性格：冷静でしっかりした性格。面倒見が良く、困っている人はほっとけないお人好し。双也と同じく誰にでも優しく、仲間思い。仲間を悪く言われるのは許せないが双也が代わりにしているので、やり過ぎない様に歯止め役をしている。

身体能力：双也程ではないが身軽。だが、そこは力で補っている。罅迫り合いにはほとんど押し勝つ。

詳細：刀使い・双也の相棒・光、火、水、氷の氣を使うことができる

主人公たちの設定（後書き）

次は技＜体術＞の設定を書きます。

技<体術>(前書き)

『ネギま!』の技パクリました!

技<体術>

〈双也〉

- ・桜華崩拳おうかほうけん

光の氣を拳に乗せて攻撃する技。

- ・黒狼爪牙こくろうそうが

闇の氣を拳と脚に乗せ、連続で敵に攻撃する技。

- ・雷華崩拳らいかほうけん

雷の氣を拳に乗せて攻撃する技。数秒間麻痺させる。

- ・風刃脚ふうじんきゃく

風の氣を脚に乗せ、真空の刃を放つ技。

〈氣力・掌握〉

- ・疾風迅雷しつぷうじんらい

雷と風の氣を全身に纏い身体能力を上げる技。縮地の速度が上がる。
連続攻撃の速度が上がる。

・闇輝光響あんきしつこうきょう

光と闇の氣を全身に纏い身体能力を上げる技。持ち前の素早さが下がるが、力が通常の一刀以上になる。

く奥義く

・雷黒迅風らいくろくじんふう

疾風迅雷と闇輝光響を同時に掌握した奥義。二つを合わせた為、すべてのステータスが強化される。だが氣を異常に使う為、一分間しか使えない。

く一刀く

・裂空脚れつくうきゃく

光の氣を脚に乗せ、無数の刃を放つ技。

・紅蓮拳くれんけん

火の氣を拳に乗せて攻撃する技。敵を軽い火傷にさせる

・氷迅凍霸ひょうしんとうは

氷の氣を拳に乗せて攻撃する技。

・龍水爪脚りゅうすいすけあし

水の氣を拳と脚に乗せ、連続で敵に攻撃する技。

〔氣力・掌握〕

・天炎幻翔てんえんげんしょう

光と火の氣を全身に纏い身体能力を上げる技。力が上がり、攻撃速度も上がる。

・氷葵水碎ひょうきすいさい

氷と水の氣を全身に纏い身体能力を上げる技。力が下がるが、素早さが通常の双以上になる。

く奥義く

・轟炎氷砕こうえんひよこさい

輝炎轟翔と氷葵水砕を同時に掌握した奥義。二つを合わせた為、すべてのステータスが強化される。だが氣を異常に使う為、一分間しか使えない。

く双也・一刀く

・縮地しゅくち

脚に氣を集中して一瞬で相手の懐に入る。

・虚空瞬動こくうしゆんどう

何も無い空中でやる縮地。

・治癒功ちゆこう

氣で怪我などを治す。

技<体術>(後書き)

次も技設定です。

技<剣術>(前書き)

テイルズ技入ってます！

技<剣術>

く双也く

・双幻乱舞
そつげらんぶ

残像が見える程の剣戟で相手を斬り刻む超連続攻撃。

・光影双刃
こつえいそつじん

光の氣を纏い、前方の敵に交差させた斬撃を放つ技。

・黒龍爪
こくりゅうそう

闇の氣を纏い、龍の爪の様な斬撃を前方周辺の敵に放つ技。

・雷斬衝
らいざんしゅう

雷の氣を纏い、一步踏み出して斬撃を繰り出す技。

・風牙絶咬ふうがぜつこう

風の氣を纏い、縮地で相手に威力の高い一突きを浴びせる技。

↳疾風迅雷時の奥義しつぷうじんらい

・紫電滅天翔しでんめつてんしょう

前進しながら片方の手で連続突きを繰り出し、もう片方の手で斬り上げ、空中で数回斬ってから急降下して地面に突き刺す奥義。

↳闇輝光響時の奥義あんきこうびょう

・極光月華きょくこうげつが

剣を突き立てながら高速で移動して四方八方から敵を切り刻む奥義。

↳雷黒迅風時の奥義らいくろくじんふう

・爪燕狼影刃そつえんろうえいじん

二十五回にも及ぶ剣戟を相手に与える奥義。

く
一
刀
く

・れつくうじん
烈空刃

見えない速さで剣を駆り、発生した真空波で前方の敵を切り刻む技。

・げつせんこう
月閃光

光の氣を纏い、三日月を描くように斬り上げる技。

・まおうえんげきは
魔王炎撃波

火の氣を纏い、左から右、右から左へと二回なぎ払う技。

・碎氷刃さいひょうじん

氷の氣を纏い、十字に斬り付ける技。

・斬影水流刃ざんえいすいりゅうは

水の氣を纏い、流れる水をも断ち斬る様な鋭い斬撃を放つ。

↳天炎幻翔時の奥義てんえんげんしょう

・光龍奏焰舞こうりゅうそうえんぶ

剣を地面に擦り付けて着火し、敵を大きく斬り上げ、空中で連続斬りを行い、斬り下ろす奥義。

↳氷葵水碎時の奥義ひんぎすいさい

・幻魔氷迅破げんまひょうじんは

前方周辺の敵を数回斬った後に斬り上げ、落ちてきた所を交差に斬る奥義。

〽轟炎氷砕時の奥義〽
こうえんひょうさい

・氷雪焰滅爪
ひょうせつえんめつそう

一撃が重く五回の剣戟で相手を薙ぎ倒す奥義。

〽双也・一刀〽

・百花繚乱
ひゃくかいらん

広範囲の敵を吹き飛ばす技。

・百烈桜華斬
ひやくれつおうかざん

無数の剣戟で周囲の敵を斬り刻む技。

〽共鳴技〽

・滅爪乱牙
めつしゅうらんが

双也の双幻乱舞そうげんらんぶと一刀の烈空刃れつくうじん、二人の連続攻撃で敵を殲滅する共鳴技。

〽共鳴奥義〽

・紅蓮爆雷刃
くれんばくらいじん

双也の疾風迅雷時の奥義しゅうふうじんらい、紫電滅天翔と一刀の天炎幻翔時の奥義しでんめつてんしょう、光龍奏焰舞を組み合わせ、敵を一掃する共鳴奥義てんえんげんしょう。

技<剣術>(後書き)

技などは後々追加します。

次回から物語に入ります。

第1話〜雷速と焰碎の名を持つ二人〜（前書き）

遅くなりました。…取り敢えずすいません。

自分の小説は会話文が多めになると思う……けどいいや！

まあ、ハッキリ言って駄文ですけど、どうぞ！

第1話〜雷速と焰碎の名を持つ二人〜

20xx年3月15日。

ここは女子高の聖フランチェスカ学園。

今年から学園長の意向で共学にしようとする男子を数人、試験無しで入学してもらったのだが、現生徒会たちから・・・

『共学にするのであれば、男子たちにも女子の受験生たちと同じ試験をして、どんなに少なくとも武術に優れた男子だけ入学させて下さい。』生徒会一同』

という生徒会からの意見があり、女子の受験生と同じ試験をする事になった。ここまで武術に拘るかという点、この聖フランチェスカ学園は武術に優れた女子生徒たちが通う武人学校だからである。その中でも生徒会は、ある行事で先生を倒した四人が生徒会に入る事ができ、その生徒会の生徒会長は学園長に意見できる権限を持っている為その意見は採用された。男子の受験生を募集したところ、数百人も集まった。だが試験は難しく失格者が続出した。試験はほとんど進み、最終的に残ったのはたったの五人となった。

審判役の先生「では、最終試験を始めます。五人とも頑張ってくださいね。」

審判役の先生が激励してくれる。それに男子たちは……

男子たち「は、はい!!」「………」（コクッ）

二人の男子は頷くだけだが落ち着いている様子に対し、三人の男子は返事を返すものの緊張している様な返事を返す。これほど三人が緊張している訳は、最終試験が学園の教師を二人相手にし、五分間戦い勝つか、時間一杯耐える事だからである。女子の受験生たちは十組十人で分かれて戦い、失格者が増えるものの二十八人が最終試験に合格した。そして今から男子たちの番である。審判役の先生が手を挙げ……

審判役の先生「始め!!」『『『チャキッ』』』

男子3人「いつくぜえええ!!」「はああああ!!」「うおおおお!!」

審判役の先生が手を下ろすのを合図に、男子三人がその合図と同時に連携して先制攻撃を仕掛けるが……

『ガキンツガキンツ』

試験官の先生A「君たち息ぴったりね。今の攻撃は良かったわよ」（以後、先生A）

試験官の先生B「速さも力も申し分ないしね」

(以後、先生B)

先生A「でもね、君たちが、今相手しているのは……」『カチッ』

先生B「フランチエスカの先生。だから今の攻撃だけじゃ……」『カチッ』

二人の先生それぞれお互いの武器を交差させ……

試験官の先生A・B「勝てないわよっ!」

『ズガガガガガガッ』

男子たち「うわああああ!」「」

斬撃で三人を吹き飛ばした。

男子S「うっ……っ……つよ……すぎ……る」『ばたっ』

男子R「さ、さすがに先生たち相手にはかなわないよ」

男子Y「くっ、女子はこ、こんな人たちを相手にしてたのかよ」

と言に残し三人の内一人は打ち所が悪かったのか気絶し、残りの二人も戦える状態ではないので失格となった。残るは二人。

????「ありやく、失格になっちゃったかあ。考えは良かったけど、速さが足りねえかな」

????「お前と比べて如何するんだよ。でも、仲間が減っちゃったな。折角、同じ高校に入れると思ったんだけどな」

????「だよなあ。俺も、結構三人の事気に入ってたんだけどなあ。……でことで、三人を治療してくっからその間に試験やってくれ」

????「分かった。」

そう言つて二人の内の一人が三人の所に近づいていった。そして残つた一人は

????「聞いてた通りです、先生。あいつが三人を治療している間、

先に試験をさせてもらいます。その後であいつにも試験をやってもらいます」

先生B「いいけど、一人で大丈夫かな？」

????「大丈夫ですよ。負けませんから」『にこっ』

先生A「!?!?!?!?!?言ったわね。私が一対一で相手をするわ。後悔しないことね!」『スッ』

????「お手柔らかに」『スッ』

男子は木刀を腰から抜き……

『ガキンッ』

試験が始まった。

優夜

俺たちは先制攻撃を仕掛けたが先生たちに吹き飛ばされ、戦えない状態になり失格となった。そこに二人組の男子の一人がこつちに来た。

もう一人は先生と試験をしているみたいだ。

???「よっ、とりあえずお疲れさん。名前聞いてもいいかあ？」

優夜「あ、ああ、俺は鉄優夜。で、あそこで気絶してるのが久佐壁彰吾だ」

凌平「僕は、くろやじょうへい黒夜凌平です」

優夜「それよりあの人たち強いぜ。油断したら失格になるぞ」

????「先生だし当たり前じゃあねえ？まっ、忠告さんきゅ。そんな事より怪我治すぞ？」

凌平「治すってどうやって？」

????「こっやって」『スッ』

俺たちに手を向けて……

????「じゆいこう治癒功」

そう言って少しすると俺たちの怪我が治っていた。

凌平「えっ、怪我が治ってる!？」

優夜「ど、どうやって治したんだ!？」

「???」お前らに俺の氣を流した、としかいいようがねえなあ」
「スッ」

彰吾にも同じ様な事をして怪我を治した。

凌平「す、すげえ」

優夜「お前、氣を使えるのかよ！」

「???」使えるよ。ちなみにカズも使えるぜ」

凌平「カズ?.....その人って、あそこで戦っている人の事？」

双也「そつ。ほんごうかすと北郷一刀、俺の相棒。あつ、俺は日向双也。ひなたそうやよろしく。
.....んじゃ、治療も終わつたしそろそろカズの所戻るなあ」

そう言い残して一刀の所に戻っていった。俺はその名前を聞いて氣になつていた。

優夜「日向...双也.....北郷...一刀」

凌平「うっくん、何処かで聞いた事ある様な気がするよね」

凌平も聞いた事がある様で一緒に悩んでいた。そして俺はある事を思い出し、二人の姿を見た。双也は普通より少し短い木刀を四本待っており、今も先生と戦っている一刀は双也とは違うがこれもまた普通のよりも少し長めの木刀を使っている。って事は……

優夜「……わかったぞ！あいつらは九州で噂の二人組、双剣使い、《雷速の双也》と長刀使い、《焰砕の一刀》だ」

凌平「えっ、あの二人が！？ホントに!？」

優夜「ああ！あの四本の短い木刀と一本の長い木刀が証拠だ！」

俺たちは憧れていた人たちに会えて少し興奮している。

凌平「まさかこんな所であの二人に会えるなんて感激だよ！」

優夜「そつだな。……つと彰吾を起こさねえと。おい、彰吾起きろ」

彰吾の体を揺すった。少しすると彰吾が目を覚ました。

彰吾「…うつつ…あれ？なんで俺、怪我がないんだ？それに体が軽い。どうなったんだ？」

優夜「俺たちは先生たちの斬撃喰らって、戦えない状態になった。それで失格になったんだ」

彰吾「…そつかあ。失格になっちゃったか。…んっ？それじゃあ怪我が無くなっただのは何で？」

凌平「それは双也さんのおかげだよ」

彰吾「双也さん？…も、もしかして、それってあの、『雷速の双也』か！…って事は、『焔碎の一刀』もいるのか？」

悠平「いるよ。あそこで一刀さんが戦って…る…よ」

彰吾「ん？どうしたんだりょう…へ…い」

んっ？凌平と彰吾が試験の方を見た瞬間、固まってしまった。俺も試験の方を見て凌平たちが固まった理由が分かった。それは…

一刀が先生を倒してたんだ。

第1話〜雷速と焰碎の名を持つ二人〜（後書き）

話考えるのってやっぱり難しいね。書いてる人、マジ尊敬します。

まあ、これからも駄文なりに頑張って行きます！

感想、アドバイス等ありましたら、言ってください。

ではまた次回に

第2話〜時間稼ぎ〜（前書き）

はい、第2話です。

戦闘風景が上手く書けているかが心配です。

第2話〜時間稼ぎ〜

〜一刀〜

ソウが三人を治療しに行ったその頃、俺は先生と戦っていた。先生の武器は両刃剣だ。

『ガギギギギッ』

先生A「少しはやるよう…ね!」『ガキインッ』

一刀「それ程でも!!」『ガギインッ』

先生A「くっ! (なんて重い一撃なの)」『ぐらっ』

体勢が崩れた。それを確認した俺は、技を放つ。

一刀「『百烈桜華斬』!!」『ガガガガガッ』

先生A「うっ!」『ガギギギギッ』

あれも止めるのか。さすがここの先生だな。……早く戻って来ないかな、ソウの奴。

一刀「ふう〜、さすがですね。体勢が崩れたところを狙ったのに」

先生A「ハアハア…狙いは良かったけど、そう簡単には行かないものよ。……（そういえばこの子、さつきから全然息が上がってない！？）」

双也「ただいまあ〜。三人の治療終わったぜ」

おっ…先生と話しているとソウが戻ってきた。あの三人の治療が終わったみたいだな。それじゃあ……

一刀「時間稼ぎも終わった事だし……二割位上げますか」

それを聞いて先生は驚いている。多分、自分は本気でやっていたのに、俺がたった三割程度しか出していなかった。…にもかかわらず、自分と互角に戦っていた事に驚いてるんだろうな。

先生A「えっ？…君は今まで本気でやっていなかったの!？」

一刀「はい。今まで三割ぐらいでやってました。……あっ、手を抜いていた事は謝ります」

先生A「べ、別にいいわ。……（たった三割で私と互角以上に戦えるなんて……この子、一体何者？）……あなた、名前は？」

…この先生、資料とか読まないのかな？

一刀「北郷一刀。……《焰碎》と言えば分りますか？」

九州で呼ばれている二つ名を言ったら案の定、先生は驚いた顔をした。……やっぱりこの先生、資料とかあんまり読まない人だな。

先生A「君が九州で噂の二人組の一人って言うの!？」

……この二つ名、この学園まで届いてるんだ。……知ってる人ってどの位いるんだろ？

一刀「ええ。……そんで試験待ちしているのが……」

双也「カズ〜。自己紹介は後で俺がやるから、早く終わってくれ〜」

……相変わらず耳が良いな、あいつは……はあ……

一刀「って言ってるんで終わりにしましょうか」『スッ』

先生A「え、ええ。……でも、終わるのは……」『スッ』

仕掛けられる前に……決める!!

一刀「『縮地』」

先生A「あなた『シュンツ』……!？」

一刀「『月閃光』!!」『ズバァンツ』

懐に入り、そのまま木刀に光の氣を纏わせた技を力一杯放った。だが……

『ガキイイン』

先生は、すかさず後退してギリギリのところであの斬撃を防いだ。

先生A「くうっ!!……ハア……ハア……(何、今の?…何とか防げたけど、腕が痺れて動かない。……これは、私の…負け…ね)」

あれも止められた。…ほつんと凄いなこの先生は……でも…

一刀「先生。…腕動きます?」

多分、先生の腕は、痺れて動かないと思う。防いだ時、俺の斬撃を根本の方で防いでたからな。

先生A「(…この子は気づいてるのね。)…『フルフル』いいえ、動かないわ。……試験は私が続行不可だから合格よ、北郷君。いい腕してるわよ。…(この子なら生徒会も……もう一人の子も見てから決めないといけないわね)」

一刀「はい!有難う御座いました!」

双也「カズ〜!!」『ドンッ』

一刀「っ!?!…ソウ!いきなりのしかかるなよ!」

双也「わりわり。……とりあえず、先に合格おめでとさん！」

一刀「おう。……ソウも頑張れよ！」『ゴーンッ』

双也「おう！すぐに追いつくからな！！」

拳をぶつけ合い、ソウを激励する。するとアナウンスが聞こえてきた。

審判役の先生「最終試験、男子一人目の合格者は、北郷一刀君です。続けて日向双也君の試験を始めます。日向君は準備をしてください」

双也「うし！呼ばれたし、行ってくるな〜」『うずうず』

…あの様子だとすぐに終わりそうだな。……まあ試験だし、いつか。

一刀「頑張ら北郷君」…はい？」

後ろから、誰かに声をかけてきた。

一刀「あ、先生。如何したんですか？…後、腕大丈夫ですか？」

先生A「腕は…まあ大丈夫よ。それよりあの子は強いのか？なんかのんびりした感じだけど…」

…何処行っても聞かれるな。まあ、確かにのんびりしてるけど…

一刀「それなら、全然心配無いですよ。俺と同じくらい強いんですか。…多分、始めから本気…の一步手前で行くと思うんで試験はすぐ終わると思いますよ」

奥義は使わないだろうけど、あれは使うだろうな。

先生A「え！？…すぐ終わるって何分くらいで？」

一刀「あの様子だと…一分以内で終わるかもしれませんね」

先生A「一分！？い、いくらなんでも一分は言い過ぎよ。今からその子の試験をする先生は、先生の中でも強い方にいる人よ」

一刀「先生も強い方にいる人ですよ？あそこまで俺の攻撃を防い

でたんですから。」

先生A「ま、まあね。でもあっちの先生の方が上よ。……仮に……もし仮に出来たとして、それは君にも出来たの？」

……言うていいんだろうか？……まあ、素直に言っとくか。

一刀「一応出来ます。……でもまあ、俺の場合時間稼ぎでしたから、そんなに早く倒す必要が無かったのでゆっくりとやらせてもらいました。」にこっ『

先生A「そ、そう。……（この子たち、規格外すぎるわ！……でも、この子たちなら……）」

一刀「あと……あいつの速さは異常ですよ」

先生A「それはどういう事？」

一刀「まあ、見てたら解りますよ。……《雷速》の名は伊達じゃあないって事が」

審判役の先生「これより日向双也君の試験を始めます。………始め

「!!」

先生と話していたら審判の合図があり、ソウの試験が始まった。

第2話〜時間稼ぎ〜（後書き）

外史に行くのはまだです。

アドバイス・感想・誤字脱字などありましたら言ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6346x/>

真・恋姫†無双～雷速の双剣使いと焰砕の長刀使い～

2011年11月20日19時13分発行